

# 日中国交正常化 40 周年 以史為鑑、面向未来

江原 規由 *Noriyoshi Ehara*

(一財) 国際貿易投資研究所 研究主幹

## 要約

- ・日中関係は、1972 年の日中国交正常化以後、熱烈歓迎、冷静実務、政冷経熱の関係を経て、現在、戦略互惠の関係を構築する時期にある。
- ・あるアンケート調査によれば、現在、日本人の対中、中国人の対日イメージは、日中国交正常化以来最悪の状況にあるとの結果がでている。日中国交正常化から 6 年後の 1978 年に鄧小平氏の提唱する改革開放路線が採られ、中国は、政治重視から経済優先の国家運営に面舵を切った。
- ・当時、経済の近代化を急ぐ中国にとって、すでに経済先進国であった日本は、羨望の対象であり、日本との交流の密度が濃い時代であった。現在、中国は、経済規模において、「日本から学べ」から「日本に追いつき」、2010 年に、「追い越し」、世界第二位の経済大国に躍進している。
- ・そうした中、日本人の対中、中国人の対日イメージが悪化しているという。その一方、アンケート調査では見えてこない日本国民と中国人民が共感できる交流分野は着実に広がっている。
- ・以史為鑑、面向未来（歴史を鑑にして、未来に向かう）という格言があるが、日中国交正常化 40 年を、筆者の経験にふれつつ、改革開放政策発表直後の 1980 年前後を中心に回顧し、今後を展望する。

1972 年 9 月 29 日、北京の人民大会堂西大庁における日中共同声明調印式で、日本の田中首相（当時）と周恩来総理（当時）が調印し日中両国は国交を正常化した。今年はその 40 周年である。人の成長に例えれば、孔子曰く、「四十而不惑」（四十にして惑わず）、即ち、両国は不惑の年を迎えたわけだ。

### 1. 日本人の対中、中国人の対日イメージ

今年 6 月発表された「第 8 回日中共同世論調査」<sup>注1</sup>によると、日本人の「中国人に対する印象」は、8 割を超える日本人が中国に「良くないイメージ」<sup>注2</sup>をもっており、中国人の「日本人に対する印象」は、6 割を超える中国人が日本に対し、「良くないイメージ」をもっているという。

「日本人の対中、中国人の対日イメージ」

対中：良くない／どちらかといえば  
良くない 37.9%（2005 年）→

84.3%（2012 年）

対日：良くない／どちらかといえば  
良くない 62.9%（2005 年）→  
64.5%（2012 年）

対中：良い／どちらかといえば良い  
11.6%（2005 年）→15.6%（2012  
年）

対日：良い／どちらかといえば良い  
15.1%（2005 年）→31.8%（2012  
年）

ここで、この調査結果を詳しく分析するつもりはないが、現在、日本人の対中、中国人の対日イメージは、日中国交正常化以来最悪の状況にあるといっても過言ではない。今後、日中両国関係に不信の温床がさらに広がるとすれば、両国にとって極めて不幸なことに違いない。

同調査結果では、「日中関係を重要<sup>注3</sup>と見る日本人、中国人は、それぞれ 80.3%、78.4%と、日中関係の重要性についてはともに高い評価を維持している」という。今後、日本人の対中イメージ、中国人の対日イメージが向上する可能性は決して低くはない。

## 2. 不信から期待へ

今年6月の中旬、中国のある雑誌社の友人から、日中国交正常化の様相を記録した16ミリフィルムの映像を見せてもらった。未公開の部分がほとんどだというそのフィルム映像に写っている人の多くは故人となっているが、空港で田中首相を出迎えた周恩来総理（当時）をはじめとする誰もが満面笑みを浮かべている。筆者の知る限り、こういう光景は、その後の日中両国で繰り返された記念・友好・交流イベントのいかなる場面においても目にしていない。日中両国が「不信」から「期待」へと変わりつつあることを、現場にいた人たちの「笑み」が能弁に語っているようであった。

## 3. 台湾バナナとアンパン

40年前、国交正常化のため訪中した田中首相（当時）は、宿泊先の釣魚台の迎賓館に到着し部屋に入って大いに驚いたという。「外は猛暑だが、部屋の温度は田中が好む17度に設定されている。部屋の隅には、大

好物の台湾バナナと銀座四丁目の木村屋のアンパンが並べられていた。

～中略～ 朝食では、味噌汁に、飲みなれた柏崎市にある老舗西牧の三年味噌汁が用いられた」（服部龍二著『日中国交正常化』130～131ページ 中央新書）。

論語に“朋あり遠方より来る、また楽しからずや”という格言がある。正に、遠方から大任を背負ってきた総理を歓迎する中国側の心憎いほどの配慮であったと同時に、中国の情報収集の徹底振りが窺える。

## 4. 訪日ミッション今昔の光景

正常化当時、四人組の台頭などもあり、中国国内は政治的、経済的混乱が続いていた。こうした状況は、1976年に毛澤東、周恩来、朱徳の巨星が落ち四人組が逮捕・失脚し、その後、復権した鄧小平が1978年12月に改革開放政策を打ち出した頃から徐々に改善の方向に向かう。中国は、それまでの「政治重視」から、後年「発展は硬道理」（発展こそ正しい道だ）などのスローガンにみられる成長第一主義の経済優先の国家

運営、即ち、改革開放路線へと大舵をきった。

当時、筆者は、日中経済交流の促進を主業務とするある財団法人に勤務していたが、連日、中国からの訪日ミッション関係の業務に追われていた。同財団は、経済先進国日本の経験を学ぼうと中国各地・各分野から連日のようにやってくる訪日ミッションの受入れ、また、日本からの訪中経済交流ミッションの派遣に奔走していた。

今でこそ、日本の観光地から量販店内などにいたるまで、あらゆるところで、中国人の姿を見かけるよう

になったが、当時は、観光目的で中国本土から日本を訪れる中国人は皆無で、来日中国人のほぼ全てが公務であった。

因みに、日本観光庁が発表した調査結果によると、2011年の訪日外国人観光客のうち、中国本土からの観光客は104万人で、韓国(166万人)について第2位。消費総額が1964億円(外国人観光客全体の約4分の1)で第1位。2位以下は、韓国、台湾、米国、香港の順となった。中国人観光客の間ではカメラ、時計、家電など高級商品の人気が高いという。

### 改革開放政策発表直後の訪日・訪中ミッションの一例(1979年～1982年)

訪日ミッション	訪中ミッション
中国国家経済委員会生産工程管理考察団	日本高エネルギー物理訪中団
中国国家基本建設委員会訪日代表団	
中国冶金工業部建築抗震技術考察団	日本油圧応用技術交流代表団
中国国際貿易促進委員会(地方分会)訪日代表団	
中国食品衛生標準技術考察組	中国原料炭技術調査団
中國企業管理考察団	
無錫市企業経営管理技術訪日考察団	日本食品機械技術交流訪中団

## (1) もちつもたれつ

当時の訪日ミッションの滞在中の旅費など必要経費は、日本側が丸抱えというケースも少なくなかった。

今日でこそ、中国は輸出額と外貨準備額で世界第一位となったが、当時は外貨不足の状況であり、訪日ミッション・メンバー各位は滞日中相当不便を感じていたはずである。筆者には、当時を振りかえると、忘れられない経験、“朋あり遠方より来る、また楽しからずや”という格言が実践されているのではないかと思える場面が甦ってくる。例えば、滞日中の衣・食・住のうち食を例にとると、多忙な滞日スケジュールの合間に、ミッション・メンバーが外食することがある。その際、都内の高級中華レストランでは驚くほどの超格安料金で彼等に食事を提供するのが常であった。もちろん彼等が身銭を切る時の場合であり、日本側が支払うとなると、通常料金が請求されたものである。

ミッションメンバーは、悪びれる様子もなく淡々と食べ乾杯をしていた。格言の実践もさることながら、このごろ対中ビジネスでよく耳にす

る互利互惠 (Win-Win、Give and Take) の関係が実践されていたのではないかと思える。「優待することで、このレストランはその後、中国からどんな見返りがあったのか」などと穿った見方はしたくはないが、かつて超格安食をミッション・メンバーと共にしたレストランの前を通ると、ふとそんな思いに襲われることがある。

## (2) 当時と今

今日、当時とは比較にならないほど多くのミッションが中国各省・市から訪日するが、その目的は、ほとんどの場合、招商引資（企業誘致）である。最近では、日本の中小企業の誘致に熱心なようであるが、招商引資の説明会は、日本を代表するホテルで行なわれ、説明会終了後にはホテル内で会食懇談会が実施され、よく豪華な食事が参加者に提供されたものである。

最近では、「三公消費」<sup>註4</sup>の制限もあってだいぶ質素になってきているが、説明会に出席するたびに昔日の光景がよみがえってくる。訪日視察ミッションによる「日本製品買

出し」の頃から、官民参加の「日本企業誘致」の時代へと、ミッションの来日目的は大きく変わっている。今後は、中国企業の対日投資を促進するためのミッションの訪日を期待したい。

最近の訪日ミッションのほんの一例

唐山市及び曹妃甸新区投資環境説明会（6月）

2012 中国四川省（日本）投資環境説明会（5月）

川崎市・瀋陽市環境産業セミナー・調印式（5月）

中国煙台市ハイレベル経済貿易懇親会（5月）

2012 年吉林省経済貿易交流会（4月）

### （3）量販店で蘇る昔日の光景

ついでながら、訪日ミッションの特殊なケース（スケジュール）につき、もう一点紹介しておきたい。今もそうであるが、中国では、安全・安心で、高品質な日本製品は熱烈歓迎されている。当時、中国国内には日本製品を販売する店はごく限られていた上、販売品目も少なかった。

そんな中での訪日である。ミッション・メンバーは、日本での任務が終わり帰国の途に着く前に決まってもう一仕事したものである。それは、日本製の家電製品（主に、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、カメラなど）を買って帰ることであった。こうしたミッション相手の小規模な電気商品店が都内各地にはいくつもあり、彼等が購入した商品の中国への搬送手続も代行していた。縁者・友人などから依頼された商品を含め、大量に買い付けていくのが常であった。失礼な話しながら、当時中国の公務員の給与は非常に低かったはずであり、いわんや、外貨不足の中国からの来日にしては、よく大枚な外貨（日本円）で、こうした日本製品が買えるものだと、いつも不思議に思ったものである。

こうしたミッション相手の小規模な電気商品店は、今日の量販店といったところであろうか。当時、彼等が買い求めた製品のほとんどが、今や中国で生産され日本に逆輸入されるようになってきているが、量販店内には中国語が流れ、多くの中国人観光客が高価な日本製品をまとめ買いする

ところを目にするにつけ、ここでも、昔日の「日本製品買出し」の頃の光景がよみがえってくる。

ついでながら、当時、ほとんどの訪日中国ミッションが京都を訪問していたが、その際、必ず日程に組む行き先があった。嵐山にある周恩来記念石碑である。周恩来は1917年から1年半ほど日本で過ごしている。石碑には、彼が帰国間近（1919年4月）に表した「雨中嵐山」と題する詩が刻まれている。周恩来は中国人から最も尊敬されている指導者の一人であり、中国訪日ミッションは、その足跡を京都でも辿っていたわけである。

## 5. 訪中ミッションの今昔の光景

それでは、当時日本からの訪中はどうであったか、1980年前後の状況から紹介したい。

今日、例えば、北京を一見しただけでは、東京とどこがちがうのか認めるのはそう簡単ではない。北京市の威容は東京を凌駕しているところが少なくない。1980年代は、この違いは明らかであった。80年代初期の

北京を中心にそのごく一端を振り返ってみる。

### （1）北京空港で

当時、中国を訪問するたびに、首都北京といえども、一昔前にタイムスリップしたような思いにかられたものである。

#### ①入国検査

入国時に厄介であったのは、申請書に貴重品や外貨を事細かに記入しなければならないことであった。帰国時にその申請書と照合されることになっていたの、記入漏れがないか気を遣ったものである。記入してあったモノ（カメラなど）がないと、規定の罰金をとられることもあった。まだ訪中する外国人は少なかった頃である。随分のんきな事をやっていたものだと、当時を振り返ってよく思う。今日では、持ち物は入国時も出国時もほぼノーチェック、ただ、当時より格段に厳しくなったのが安全検査だ。問題なく金属探知機を通っても、必ずボディチェックされる。そのたびに、昔日の古びた空港での情景が蘇るが、それ以上に、

世界における「中国の今」を実感させられる。

## ②外貨兌換券

次は、現地通貨への兌換だ。市内でも、兌換できたが、まず空港で多少兌換する人が多かった。現地通貨といっても人民元ではなく外貨兌換券である。「貴族の通貨」と呼ばれた外貨兌換券は、事実上の外国人向け通貨で 1979 年から発行され 1995 年 1 月 1 日をもって廃止されている。外国人は原則どこでも使うことが可能であったが、外貨兌換券でなくては支払いの出来ない外国人専用の商店があった。こうした店では、現地人は買い物はおろか入店することさえ難しかった。外資兌換券の流通は、外貨が少なかった中国にとって苦肉の策であったのであろうが、今日、世界第一位の外貨準備高を誇る中国になろうとは、当時の誰しもが予想していなかったであろう。外貨兌換券は、いわば、当時の中国内における「国際通貨」であったわけだ。現在、人民元のハードカレンシー化が話題に上るたびに、この「貴族の通貨」のことが思い浮かぶ。

なお、帰国時外貨に兌換できる額は外貨兌換券兌換額の半額までで、兌換証明書を提示しないと兌換してくれなかった。

## (2) 首都北京の街中で

### ①長安街

とにかく自転車が多かった。通勤ラッシュは自転車だった。市内に車は少なく、公共用か公用車がほとんどでタクシーなどなかった。ガソリンスタンドを目にすることはなかった。「そのけ、そのけ、お馬が通る」の車優先の社会で、車のクラクションはいつも鳴りっぱなし。騒音公害そのものであった。夜間にライトを点灯している車はなく、時々、フラッシングして前方の状況確認はしていたが、道を歩いていて怖い思いをした人はきっと多いはずだ。まだ、走っている車の多くがメイドインジャパンの輸入車であった頃の話である。

北京のメインストリートである長安街には、むき出しの古いビルや空き地が多く高層ビルも、中央分離帯もなく、空が高く、広く、空気も澄んでいた。夜中の 0 時以降にはラバ

車が蹄の音も高らかに北京飯店前を  
通っていた。

今：今も、車優先の社会は変わらな  
いが、世界一の自動車生産・新  
車販売大国となり、長安街は世  
界の車のショーウィンドーと呼  
ばれるまでになった。マイカー

やタクシー通勤族が増え、自転  
車通勤は今やファッションとな  
った。騒音公害はなくなったが、  
長安街は高層ビルに占領され、  
身動きも取れないほどの車の渋  
滞が日常化した。北京の空は低  
く淀んでいる。



1984年の長安街 左手前方は昔日の北京飯店  
(外国からのVIP訪問を歓迎する小旗が長安街を舞う)

## ②友誼商店とレストラン

お土産の買い物は国有の友誼商店が主であった。伝統的な民芸品がほとんどで、ここばかりは冷暖房のある異次元の世界であった。客は外国人がほぼ全て、従業員の接客態度はほめられたものではなかったが、つり銭が投げ返されるようなことはなく、ほかよりは数段ましであった。冷えたビールなどなくコーラも売られていなかった。

レストランでは、外国人席と中国人席に分けられているところがほとんどであった。注文してもよく待たされた。注文を取りに来た服務員をポラロイドカメラで写真を撮ってあげたら、頼んだものがすぐ出てきた。いつもレストランにはポラロイド写真機を持参し、二匹目、三匹目のドジョウをねらったものだった。日本食を食べさせてくれるところは数軒だけであった。

今：今の中国では、友誼商店の影はすっかり薄くなった。外貨でしか買えなかった高価な外国製品を買っているのは、中国人のほうが圧倒的に多い。もちろん支

払いは現金のみならず、クレジットカードでも OK になった。北京など大都市には、世界の有名店舗やブランドショップが進出し、中国は、日本を抜いて世界第二位のブランド製品購入国になろうとしている。ありとあらゆる国内外の冷えたビールが店頭に並ぶ。席を外国人用と中国人用に分けているレストランがあったとしたら、轟々たる非難とボイコットされるのが落ちであろう。北京の 1 人当たり GDP は 1 万 2643 ドル、日本のほぼ三分の一になった。高級レストランで高価な食事をするのは、外国人でなく中国人がほとんどである。ポラロイドカメラは化石的存在となり今はデジタルカメラだ。中国で製造されたデジタルカメラが対日輸出されている。こうした変化は、外資系企業の対中進出によるところが大きい。2012 年 5 月時点で 43 万 9300 余社が対中進出しているという。ありとあらゆる製品とサービスが北京で提供されている。日本食レストランなどは、数えられ

ないほど増えただけでなく、スーパーにはパック入り握り寿司が並ぶ。

### ③ビジネス現場

当時、滞在ホテルでは、チェックイン手続後、カギは各階で渡される。部屋のカギを閉めなくても盗難などまったく心配する必要はなかった。不自由したのは国際電話だ。電話交換に番号をつけて、コールバックをひたすら待つ。いつかかってくるかわからなかった。

銀行では、預金を下すのも何をするのも半日仕事。写真電報というのがあった。これを打つのは電話局でやはり半日仕事。FAX 機などまだなかった頃の話である。コピー機も希少だった。西安でのことだが、翌日の技術交流セミナーの日本の講師がOHPを使おうと思った。内容を透明フィルムシートにコピーしようとしたが、西安にはコピー機が数台しかないという。中国側がコピー機のあるところをやつとのことで探し当ててくれた。コピーが終わったのは深夜だった。

ある中国での展示会でのことだが、

お金があるのに買いたいものが買えないということもあった。展示品を買いたいという中国企業が遠路商談にやって来た。商談成立かと思いきや、支払いは「人民元で」という。人民元が外貨に兌換できなかった頃である。商談は流れた。当時、展示会の中国側主催者は国から外貨割当枠をもらっていた。どこの誰がどの展示品を買うかは、ほとんど前もって決められていたようだ。それにしても、老若男女の一般見学者が後を絶たなかったのは不思議だ。外国製品の展示される展示会は、一般の人にとって海外を知る大きなチャンスであったようだ。

車で北京から 100Km ちょつとの天津に行くには許可証が必要であった。途中検問所があり必ずチェックされた。許可証がないとガソリンも入れられなかった。

前記原料炭ミッションで訪中した折、原料炭輸入炭鉱への視察は鉄道だった。その移動には、最後部にミッション専用の車両が連結されていた。中国人乗客と話す機会は皆無であった。外国人の訪中では、「上を下へ」の歓迎ぶりに当惑した人も少

なくないはずである。チケットの席番がどうであれ、列車、飛行機、映画館などどこでも「よい席」に案内された。無理やり席を代らされた中国の人には、“朋あり遠方より来る、また楽しからずや”の心境ではなかったはずだ。いつも申しわけないと思った。地方出張ではよく幼稚園児に出迎えられた。しきりと笑みを浮かべ遊戯して見せてくれた園児は、今や、「パーリンホー」（80年代生まれの世代という意味）として国家の未来を担う世代となっている。何もかも「外国人優先」の中国で、外国人はいつでもどこへ行っても中国人民の羨望の対象であり、特別扱いがまかり通っていた。

今：「車優先」はともかく、「外国人優先」はどこにもない。航空路、高速道路、高速鉄道（日本の新幹線に相当）などが全国をくまなく結んでおり、どこへも自由に短時間でいけるようになった。中国は今や「世界の工場」でありコピー機のみならず、多くのメイドインチャイナが世界を席卷している。オフショア

での人民元決済も拡大している。世界第二位の経済大国に躍進したことや中国が参加国最多の金メダルを獲得した北京五輪、史上最大規模となった上海万博の開催などで、今度は、中国が世界から羨望されつつあるのも事実だ。

## 6. 当時の日中経済関係

国交正常化時の日中貿易は往復で 11 億ドルに過ぎなかったが、2011 年には 3,449 億ドルまでに拡大。今や、日本にとって中国は最大に貿易相手先となった。70年代は貿易関係が中心であった日中経済関係は、1978 年中国の改革開放政策により、その後大きく変化・発展することになる。即ち、中国は、60年代から 70年代初めにかけて形成されてきた対外経済政策を 180 度転換させ、直接投資の受け容れ、政府・民間双方の資金協力も受けるという対外開放政策を採ることになる。

特に、日本とは、1978 年の日中長期貿易取り決め（LT 貿易）調印によるプラント延払い輸出が決定、1979

年には石油・石炭開発バンクローンの供与、市中銀行によるシンジケート形式によるローン供与の開始、そして同年を起点とする対中円借款（当初、大型経済インフラ分野に対する供与が主）が始まったことなどにより、日本の先進技術、機械の輸入を目的に中国政府ミッションの来日が相次いだ。北は北海道から南は九州・沖縄まで、日本を代表する企業の訪問、先進技術の視察などが日程の中心であったが、こうした日本の資金供与・技術協力が中国のインフラ整備や産業近代化に果たした役割は少なくなかった。また、当時の日本の対中輸出の拡大に一役買ったといえる。

### （１）プラント契約破棄問題と大連の DITIC 問題

そんな中、1981年1月、プラント輸入契約中止問題が発生する。その直接的契機となったのは、1978年～79年の大量のプラント輸入契約（約73億ドル、うち、日本は約6割弱）とされる。中国の急ぎすぎた経済近代化、不十分なフィージビリティ・スタディや外貨の裏付け審査などが

その原因とされるが、日本とは当時、日中経済協力のシンボルとされていた「宝山製鉄所」の工事が中止された（1981年1月）。この頃から、日中関係は正常化直後の熱烈歓迎の時代から冷静実務の時代に入ったといえる。

1990年代、広東国際信託投資公司（GITIC）を皮切りに、広州市、大連市、福建省、湖北省など地方政府直属の信託投資公司の対外債務不履行<sup>注5</sup>が発生した。最近では、地方政府の財政難をカバーするため設立された「融資平台」<sup>注6</sup>の原資返済問題が発生しているが、中国における不履行問題というのは、内容を変え時代を超えて、中国経済の成長の中にビルトインされているようである。

### （２）大連に見る 1990年代の日中経済交流の一側面

国交正常化の20周年にあたる1992年、鄧小平氏の南巡講和があり、中国の対外開放は新たな段階に入る。日中国交から南巡講和までの20年間は、中国経済における日本のプレゼンスが比較的が大きかった時代でもあった。

鄧小平氏の南巡講和が対中投資の拡大に果たした役割は絶大なものがあった。外資企業の進出拠点は沿海部が中心であったが、当時日本企業の最大の投資先は大連であった。当時の日本と大連の経済交流は、中国と海外との経済交流の縮図とってよく、時代を先取りしていたと、筆者はみる。

対中進出先として、日本企業から大連が注目されたのは、日本との歴史的関係が密接であったことや日本企業の誘致にとりわけ熱心な市長（魏富海 1983 年～1992 年、薄熙来 1993 年～2000 年）の存在を抜きには語れない。1992 年には、中国初の日本企業向け工業団地が誕生、大連における日本企業進出拠点となっている。大連は、今もそうであるが、当時は、他の外国勢に比べ、日本のプレゼンスが圧倒的に大きかった。

今日、中国は発展途上国中、世界第 1 位の投資受入国となっているが、それは、改革開放以後、中国がまず優秀で廉価な大量の労働力供給先として、次に部品調達基地として、最近では、膨大な市場の開放、人材供給などを通じ、生産、ビジネス拠点

としての比較優位性を発揮してきたことに依っている。

日本企業の大連投資ラッシュが展開する 90 年代初頭から中期にかけて、大連の進出先としての魅力は、上記の比較優位性の段階に当てはめれば、労働力の存在が大きかったが、部品調達基地としても魅力を増しつつあったといえる。1994 年には、日本企業の現地での部品調達のための「大連部品材料展」が始まる。この展示会は、その後、「逆見本市」<sup>註7</sup>として中国各地で、そして、海外でも実施されている。

今日、大連は夏ダボス会議の開催地（天津と隔年開催、2008 年の第一回開催は大連）として、また、中国北方の最大の開放都市として、国内外から、経済交流先、ビジネス拠点として注目されているが、90 年代の日本との経済交流がこれに果たした役割は少なくなかった。

### （3）中国の都市化と日中経済交流

大連に限らず、改革開放政策の下で急速に発展した都市は少なくない。現在、中国は本格的な「都市化」の時代を迎えているが、既に 90 年代に

「都市化」の雛形が中国各地で始まっていた。当時の都市化は、“古きをかなぐり捨てて新しきをがむしやらに築く”といった点に特徴があったといえる。都市の容貌は一変したが、同時に「都市病」を生む温床が生まれたのも 90 年代であったといえる。

大連もその例外ではないが、他都市と比べ、市と市民の環境意識は高かったといえる。このことは、90 年代、全国でもよく知られた「大連不求最大 大連只求最佳」（大連は最大を求めず、最良を求める）という大連市の施政方針によく現れている。この大連の環境意識の向上に大きく貢献したのは日本であったと、ある日本の市長は後年述懐している。

現在、日中間では環境保全分野で経済協力が進められているが、今後は、中国の都市化の進展という視点から、新たな日中経済交流を模索するのによいであろう。

## 7. これからの日中関係

今から、10 年前の 2002 年 9 月 28 日、筆者は日中国交 30 周年を祝うレ

セプション会場（人民大会堂）にいた。確か、日本の日中関係団体が主催したと記憶しているが、そこには、中国側から胡錦濤国家副主席、温家宝國務院副総理、曾慶紅党中央政治局常務委員（いずれも当時）など党と国家の指導者、日本側からは、村山富市氏、橋本龍太郎氏など歴代総理に加え、平山郁夫画伯などの顔があった。

### （1）高倉健から名探偵コナンへ

さらに、中野良子、栗原小巻といった当時中国で人気のあった日本人女優も出席していた。中野良子といえば、中国で 1978 年に公開された日本映画の『追捕』（日本映画名：君よ憤怒の河を渉れ）が思い浮かぶ。この映画は文化大革命後に初めて公開された外国映画で、「曾引起极大的轰动」（大センセーションを巻き起こした）との報道もあるほど、大変な人気を呼び、主演の高倉健と共に中国で大人気俳優となっていた。

2002 年当時は、後に「政冷経熱」と表現される日中関係がまだはつきりと表面化していなかった頃と記憶しているが、レセプション会場にい

て、日中関係の前途洋洋たる雰囲気  
がみなぎっていると感じたものだ。  
今日、日中両国は戦略的互惠関係に  
あるが、『追捕』が公開された頃の  
日中関係は「熱烈歓迎」の時代であ  
った。

さて、当時、熱烈歓迎された『追  
捕』の「高倉健」を現代に探すとな  
れば、それは日本アニメの「名探偵  
コナン」ではなかろうか。筆者は、  
日中小学生の文通事業に関わってい

るが、中国の小学生から日本に寄せ  
られる手紙には、必ずといってよい  
ほどに、「名探偵コナン」が登場す  
る。曰く、「コナンは私のお兄さん。  
ずっと一緒に育ってきました」、「コ  
ナンの故郷に行ってみたい」など。  
今、「名探偵コナン」は、中国の子  
供たち（若者といったほうが適切か  
もしれない）から熱烈歓迎されてい  
るといえる。



人民大会堂での日中国交正常化 30 周年祝賀会（2002 年）  
（宴卓右手中央に胡錦濤国家主席ほか日中の指導者が着席）

中国における日本映画ブーム最盛期の作品（1978年～1982年）

中国公開年 (公開映画数)	代表作品
1978年～1981年 (19)	君よ憤怒の河を渉れ、サンダカン八番娼館（望郷）、人間の証明、砂の器、ああ野麦峠、華麗なる一族
1982年～1985年 (23)	男はつらいよ（望郷編）、未完の対極、ああ野麦峠（新緑編）、蒲田行進曲、居酒屋兆治、男はつらいよ（浪速の恋の寅次郎、口笛を吹く寅次郎）、日本沈没、幸福の黄色いハンカチ

出所：中国 10 億人の日本映画熱愛史 劉文兵著 集英社新書

中国でコナンはアニメのスターとなっているが、コナン以前にも中国人から親しまれたアニメは少なくない。1980年代では、鉄腕アトム、一休さん、ジャングル大帝、90年代にかけては、ドラゴンボール、ドラえもん、クレヨンしんちゃん、ちびまるこちゃんなど。アニメに限らず、日本のTVドラマで中国で熱い視線を得たスターは少なくない。その代表は、「赤いシリーズ」の山口百恵（映画『絶唱』などでも人気を博していた）。「おしん」も熱狂的な歓迎を受けたとされるが、こちらは「おしん精神」に人気の源があったようだ。TVドラマ「おしん」は改革開放で誰もが貧しさから豊かになろうという向上心に共感したようである。

中国のある動物園が子鹿の名前を公募したところ、一般市民の投票によって、「小鹿由美子」と命名されたという。小鹿由美子とは1982年に中国で放映された「燃えろ アタック」（バレーボールの根性スポーツドラマ）の主演女優の名前である（『中国 10 億人の日本映画熱愛史』182ページ）。『中国 10 億人の日本映画熱愛史』にはある動物園としか書かれていないが、筆者は、中国である時、その動物園が反日感情が強いとされる南京の動物園であったと耳にしたことがある。

「おしん精神」しかり、そして、「子鹿名」しかり、ドラマやアニメの相互理解に果たす役目は決して少なくないことがわかる。

目下中国は、アニメ産業の育成発展に並々なぬ力を注いでおり、アニメ先進国の日本に経済交流の熱い視線を寄せている。今、日中相互の国民感情が最悪とされる中、アニメ産業における日中ビジネス関係の構築は意義が高いといえよう。

## (2) パンダ（熊猫）とトキ（朱鷺）

今、日本で熱烈歓迎されている代表はパンダであろう。1972年の国交正常化と共に「日中友好の使者」として、また昨年2月にも「リーリー」と「シンシン」が来日し、日本の子供たちを中心に大いに歓迎を受けている。蛇足だが、「パンダ」を見て、誰もが口にする“かわいい”は、今や中国で「卡哇伊」（KA・WA・YI）という中国語になっているほどだ。

朱鷺も日中友好の使者だ。このところ日本では、自然繁殖して巣立った朱鷺のことが、紙面やTV画面などを賑わせているが、一度は自然絶滅した朱鷺が、再び日本の空を跳ぶようになったのは、日中協力の賜物であることを知る日本人はあまり多くないようだ。中国から贈られた「洋

洋」から生まれた卵が孵化し国内で始めて人工繁殖による朱鷺が誕生したのが1999年。日本からは、同じく絶滅の危機にさらされていた中国朱鷺の繁殖に協力するため、それまで培われた朱鷺繁殖のための膨大な研究資料が中国側に提供されている。日本の空を跳ぶ朱鷺には、中国産朱鷺の血が流れているといえる。

## 8. 日中関係はさらなる高台へ

国交正常化以来、日中関係は、熱烈歓迎、冷静実務、政冷経熱の時代を過ぎ、現在、戦略互惠関係の時代に入っている。その間、日中貿易は部品や完成品の相互交易といった水平貿易関係の度を深め、また、中国企業の対日投資も増えつつあるなど投資も双方向時代を迎えようとしている。

注目すべきは、中国が2010年に米国と英国を抜いて日本以外で最大の日本国債保有国となったこと、今年3月、日本の中国国債の購入（最大650億元、日本が中国国債の購入を認められたのはこれが初めてのケース）が可能になったこと、6月1日

には元・円の直接取引が東京と上海の市場でスタートし、米ドルを介さずに取引が行えるようになったことなど、両国での戦略互恵関係が構築されつつある。戦略互恵関係とは、断言は出来ないが、競合しつつも協調する余地が大きく残されているということを双方が意識できる関係といっても、あながち的外れではないであろう。

日本人の対中、中国人の対日イメージが悪化しているとのアンケート調査もあるが、本稿で紹介した朱鷺もパンダも、そして、名探偵コナンも、日中両国の戦略的互恵関係のありかたを代弁しているといっても過言ではない。

今後は、さらなる戦略的互恵関係の高台を目指し、日中両国が、世界の成長センターとして期待される東アジアの発展のため、さらに、経済、科学技術の粋が結集され、人類の将来の発展に大きく関係する宇宙や海洋開発などの新たな分野でいっそうの協力関係が構築されることを期待したい。

注1 言論 NPO (認定 NPO 法人) と中国日報社が、日中両国民を対象に共同世論調査。新世紀に入って日中関係が最も深刻であったとされる 2005 年から毎年実施されており、今年で 8 回目となる。

注2 「良くないイメージをもっている」および「どちらかといえばよくないイメージをもっている」との合計

注3 「重要」および「どちらかといえば重要」との合計

注4 中央省庁および地方政府が、接待飲食、公用車、旅行に使った費用のこと。

注5 国際信託投資会社は、全国(省・市レベル)に 240 余社存在していた。国内外の金融機関から、省・市レベルの公的機関としてその信用力を背景に資金調達し、省・市のインフラ整備等のプロジェクトに投融资する外資導入の窓口的機関であったが、広東国際信託投資会社が突然経営破綻。その後、債務不履行や破綻する地方の国際信託投資会社が相次ぎ信用不安が広がった。大連国際信託投資会社もその例外ではなかった。同会社が債権銀行に対し債権の一部放棄を要請、結局、日本の関係銀行な

どが債権の 40%ほどを放棄することで合意したとされる。

注 6 地方政府の投融资会社。地方政府は、目下、都市化が全国津々浦々で展開しているが、それに必要な資金調達を「融資平台」（2010 年末時点約 1 万社）を通じて銀行などから確保している。こうした資金調達にあたり、地方政府の多くが土地譲渡収入を「融資平台」の債務返済の原資としている。2010 年末時点、「融資平台」関連の地方政府の債務残高は 10.7 兆元（約 130 兆円、2010 年末時点）で

GDP の約四分の一、同年の全国の税制収入を上回る巨額となった。

注 7 売りたいものを展示する通常の展示・見本市とは逆に、企業が買いたいもの（調達したい）を展示し、それを製造、提供できる部品・原材料メーカーを発掘するための見本市であることから「逆見本市」と命名された。1994 年大連で最初に開催され、その後 10 年間に 15 カ国 54 ヲ所で開催されている。今日でも、場所と内容を変えて、世界各地で実施されている。